

立命館をフィールドにチャンスをつかみ、世界へ羽ばたこう！

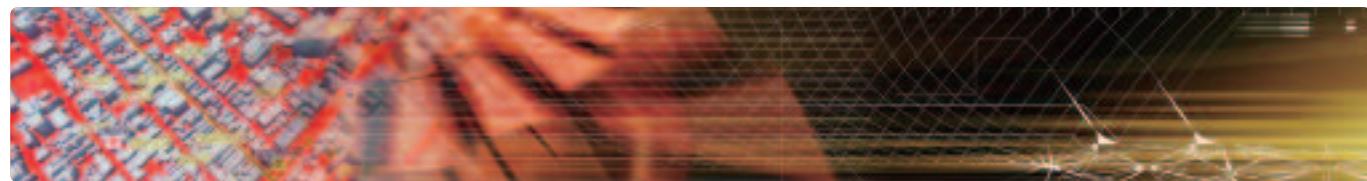
立命館大学は新入生のみなさんが学び成長するためのフィールドです。
今回紹介する様々なプログラムや制度をみなさんの目標に応じて活用し、知性と行動力を身につけた次代を切り拓く力を身につけてください。

※掲載者の回生等は2007年3月現在のものです



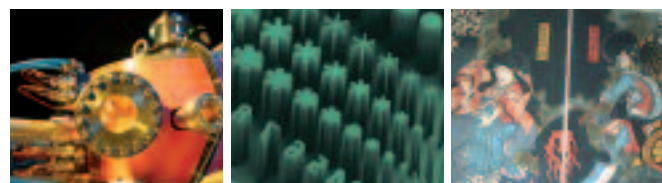
最先端の研究で学ぶ・優れた教育プログラムで学ぶ

立命館大学では、人類の福祉と社会の進歩に貢献する最先端の研究拠点や、社会的に評価されている優れた教育プログラムを多数用意し、社会の要請に応える人材の育成に取り組んでいます。



最先端の研究

国や社会から支援を受ける世界最高水準の研究プロジェクトを多数推進する立命館大学。最先端のデジタル化技術を利用して、文理融合の取り組みを進めているアート・リサーチセンターをはじめとする様々な研究拠点で、最先端技術の開発や独創的な研究を進めています。またこれらの研究に学部時代から関わることで最先端の知識と経験を蓄積することが可能です。



優れた教育プログラム

立命館大学には文部科学省から「優れた実践（Good Practice）」として採択されたプログラムをはじめとした時代の要請に応える教育プログラムを用意しています。2006年度には「人文学的知の地域還元で変わる歴史都市京都」（文学部、法学部、産業社会学部、政策科学部、国際関係学部）、「IT人材育成のための実践的キャリア教育」（情報理工学部）、「ローカル・ガバナンスの政策実践研究」（政策科学研究科）が採択されています。学生たちはこうした教育プログラムを利用して、より効果的な学習を行っています。



国際社会と連携した教育プログラム

立命館大学は海外留学をはじめとする国際教育プログラムが充実しています。世界21ヶ国・地域85箇所の留学拠点をもち、留学先や期間、レベルなどに応じた幅広いプログラムを用意。それらを利用し、毎年1200名を超える学生が海外で学んでいます。また、世界76の国・地域からの学生が学ぶ立命館アジア太平洋大学（APU）との交流も行っており、1年間の交換留学制度で学生が学んでいます。



アドヴァンスト型

外国語による専門分野の習得を目的としたプログラムです。

- 立命館大学・アメリカン大学学部共同学位プログラム（DUDP）（2学年間）
- 交換留学（1学年間）
- UBC（カナダ プリディッシュ・コロンビア）2年目派遣プログラム
- UBC2年目Summer Sessionプログラム

モチベーション向上型

外国語運用能力＋外国語による講義受講を目的としたプログラムです。

- 立命館・UBCジョイント・プログラム（約8カ月間）
- 立命館・ワシントン大学「平和学」プログラム（13週間）
- 立命館・マコーリー大学「日豪関係」プログラム（10週間）
- 立命館・ワシントン大学「環境と人間」プログラム（13週間）
- 立命館・シモンズ・カレッジ「アメリカの外交政策と東アジア」プログラム（4週間）

- 立命館・モンテレイ工科大学「スペイン語研修」プログラム（4週間）
- 立命館・ブリッセル外国語大学「フランス語研修」プログラム（4週間）
- 国際インスティテュート海外スタディ（2～5週間）

イニシエーション型

語学学習＋異文化体験を目的としたプログラムです。

- 立命館・ボストン大学「英語研修」プログラム（4週間）
- 立命館・昭和ボストン「文化・社会調査」プログラム（4週間）
- 異文化理解セミナー（5週間、13コース）



Student Interview



関目季亮 さん（理工学部4回生）立命館高等学校出身
「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」深川良一研究室所属 理工学研究科進学予定

理工学部では3回生後期から研究室に仮配属されます。私は2回生後期の実験で学んだ「土質」に興味を覚え、深川良一先生の土質工学研究室を志望しました。一言で「土」と言っても種類がたくさんあり、それぞれ性質が異なります。その奥深さに魅力を感じました。

この研究室は斜面安定、掘削、地盤環境について研究しています。私が関わっている斜面安定の分野では、「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」として、清水寺などの京都市内の重要社寺に現地観測システムを構築するなどの研究を進めています。たとえ

ば清水寺では重要文化財に指定された「奥の院」という建物が斜面に面しており、土砂崩れの危険があります。そこで各種センサーを設置し、そのデータを研究室に送れるシステムを導入しました。大学の研究室で斜面の状態をモニタリングすることができ、土砂崩れなどの危険予知に役立っています。

私が実際に関わった活動としては、斜面の崩壊について大学院生やポストドクトラルフェロー（博士課程を修了した研究者）の方々とともに時にはアドバイスをいただきながら実験を行ったりデータの分析を行ったりしています。清水寺などの重要な文化財を守る最

先端の研究に携われているというやりがいと、優秀な先輩方と共に研究を行えたことが今の自分を形づくけているという実感があります。卒業研究では「降雨時の斜面安定度評価に関する研究」というテーマで、水を含んだときの斜面の強度についてデータをもとに解析しました。卒業後も大学院に進学しこの研究室で社会に貢献する研究を続けたいと思っています。



Student Interview



高野雅範 さん（国際関係学部4回生）熊谷西高等学校出身
立命館大学・アメリカン大学学部共同学位プログラム（DUDP）参加 外務省内定

私が活用した立命館大学・アメリカン大学学部共同学位プログラム（DUDP）は、2年間のアメリカン大学への留学により、最短4年間で立命館大学とアメリカン大学の両方の学位を取得することが可能なプログラムです。まず1回生の前期は立命館大学で学び、1回生の9月から3回生の8月までをアメリカン大学で学びます。そして、3回生の9月からは再び立命館大学で学ぶというシステムです。

アメリカン大学留学中は、現地の学生とともに英語での授業を受講します。最初のうちは主に語学や一般教養を学び、慣れてきてからは政治を中心に学びました。2回生の秋セメスター

（9月～12月）にはEUについて学ぶため、アメリカン大学の正規のプログラムでベルギーへ留学しました。これも正規の学生として学ぶDUDPならではのメリットで、アメリカン大学でも様々なサポートを受けることができました。留学先のEUでは、様々な課題に直面するとともに、その課題を前進させるためには、政治だけでなく幅広い分野の知識が必要であるということにも気付かされました。そこでベルギーから戻った3回生の春セメスター（1月～5月）では「開発」や「文化」などの幅広い分野の科目も積極的に学ぶようにしました。留学中に大きな転機をもたらした出来事とし

て、駐米日本大使館でのインターンシップがあげられます。そこで感じたことは、外交官という仕事が雲の上の存在ではなく、自らが働く姿をイメージできる地道なものだということです。そのときから外交官として、世界平和に貢献するため、世界をフィールドに活躍したいという想いを抱くようになりました。帰国後エクステンションセンターで開催された国家1種内定者懇談会で3回生からでも合格は可能だとアドバイスをいただき、外交官以外の進路は考えずにエクステンションセンターで試験勉強に取り組み、合格することができました。

社会と連携した教育プログラム

立命館大学では社会と連携した学びを積極的に取り入れています。

社会の第一線に触れることで、学びの意味を再確認し、より深く学ぶことが可能になります。



インターンシップ

自らが専攻する学問への社会的要請などを就業体験において検証し、学ぶ意義と喜びを再認識するのがインターンシップです。立命館大学では多様な業界、業種でのインターンシップを実施。インターンシップ研修と事前・事後研修を組み合わせることにより、正課の単位として認定する「全学インターンシップ・プログラム」を設けています。



また、インターンシップオフィスを設置し、インターンシップ情報の提供や皆さんの希望に沿った受け入れ先の開拓など、より効果的に学べるよう工夫がされています。

ぜひ、インターンシップを通して、学ぶことの大切さと喜びを体得してください。

産学協同アントレプレナー教育プログラム

産学協同アントレプレナー教育プログラムとは「何事にも高いモチベーションで挑み、自ら学び自ら考えることのできる人材（自立的で創造力・問題解決力をそなえた人材）」「アントレプレナーシップ（チャレンジ精神）に満ちた人材」の育成を目的とした教育プログラムです。経済学部・経営学部・理工学部・情報理工学部の1回生を対象として後期に募集を行い、2回生から講義が開始され、アントレプレナーとして必要な知

識とスキルを学んでいきます。本教育プログラムを受講した学生の卒業後の進路としては、BKCインキュベータ等を利用した起業や、既存の企業内でイントラプレナーシップ（企業内リーダーシップ）を発揮するといったことが考えられています。



ボランティア教育

立命館大学では、ボランティアが持つ教育的効果に注目し、活動と大学での授業とを結びつけた新しいボランティア教育のモデルを構築。学生がボランティア活動を通じて地域に貢献しながら、地域で学び、成長することを促進する教育プログラムを提供しています。

また、ボランティア活動の拠点として、ボランティアセンターを衣笠キャンパスとBKCに設置。ボランティア関連の授業の支援や、学生の自発性に基づく学内外でのボランティア活動を応援しています。



学生同士のネットワークで学ぶ教育制度

学生のため、後輩のために活動する中で自らも成長していく、立命館大学独自の学生同士の学びあいの仕組み（ピア・エデュケーション）。サークル活動や課外活動とは一味違った彼らの活動を知り、今後の学生生活のなかで積極的に参加していきましょう。



オリター・エンター

オリター・エンターは、基礎演習などで1回生が大学の学びにスムーズに入っていけるようサポートする役割を担っています。また、1回生が充実した大学生生活を送れるよう様々なイベントの企画・運営なども行っています。

ES(エデュケーションalsサポーター)・TA(ティーチングアシスタント)

ES・TAは、授業において、先生や学生のサポートをする先輩学生・院生です。プリント配布などの作業をしたり、学生の質問に答えたり相談にのるなど、先生と学生双方をサポートすることで、授業をスムーズに進め、より効果的な学習成果を生み出す役割を果たしています。また、ES・TA自身も学生の相談に対応するために、より授業内容の理解が深まるという効果も期待されています。



スチューデントネットワーク

スチューデントネットワーク制度とは、希望の進路を実現するために学生同士が支援しあって、就職活動を盛り上げていく活動です。具体的には、「プレズメントリーダー（PL）」、「ジュニアアドバイザー（JA）」、「キャリアアドバイザー（CA）」と呼ばれる学生や卒業生による支援制度があります。

学生スタッフ

学生広報スタッフ、RAINBOWスタッフ（マルチメディアルーム等で利用者相談や機器管理等を行う学生スタッフ）、ライブラリースタッフ、オープンキャンパススタッフなどの学内で活躍する学生スタッフです。サークル活動やアルバイトとは異なる学びの場として積極的に参加してください。



山形英資 さん（政策科学部4回生）九州学院高等学校出身
全学インターンシッププログラム参加 共同通信社内定

マスコミで働きたいと考えていた私は、実際の現場を知りたいと考え、3回生の夏に事前研修と事後研修を組み合わせ単位認定される全学インターンシッププログラムで産経新聞社のインターンシップに参加しました。インターンシップでは記事の書き方や写真の撮り方を教わるだけでなく、実際に学生だけのチームでネタを探し、取材を行って記事を書きます。そしてその記事を記者の方に校正してもらい、実際の紙面にも私たちの記事が掲載されました。やりがいがあったのですが、自らの興味関心だけでなく、様々な事象扱う新聞記者という仕事に迷いを感じました。

そこで新聞記者という仕事にとられず、もっと大きな視点で自分の将来の職業について考えてみようと思いました。3回生の2月に参加したフィリピンのスービックというところで行われる海外インターンシップでは、つらい作業のなかにも喜びを見出している現地の方々の仕事の様子を見て、やりがいのある仕事につくことの重要性を認識しました。

これらの経験から自分にとってのやりがいがある仕事は何かと模索した結果、スポーツに関わる仕事をするのが一番のやりがいであり、楽しみであると考え、スポーツ記者を

目指したいとあらためて決心することができました。

帰国後、スポーツ記者になりたいという強い思いから新聞社の採用試験を受け、共同通信社の運動記者として内定をいただくことができました。

2度のインターンシップは、働き方や生き方といったものを考える転機になったと思っています。皆さんも是非インターンシップに参加して、学びを深められることをお勧めします。



原 美和子 さん（政策科学部4回生）福島県立福島女子高等学校（現・橘高等学校）出身
学生広報スタッフ 株式会社日本旅行内定

2回生から、立命館大学広報課の学生スタッフとして活動を始めました。主な活動は、立命館大学在学生向けウェブマガジン「学園通信RS Web」のコンテンツの企画・制作です。毎月、どのような企画を組むか学生スタッフ同士で会議をし、取材や原稿作成を行います。

学生スタッフになろうと思ったきっかけは、「多くの人と連携して積極的に行動する力を身に付けたい」と考えたことでした。私は2回生の夏に民間企業でインターンシップを行ったのですが、自分にはもっと積極的に行動する姿勢が必要だという反省が残りました。

広報スタッフの活動を続けていく中で、積極的に行動する姿勢と、他の学生の良い意見を吸収し、その上で集団の中で自分の考えも主張していく力がついたと思います。大学の広報という責任ある業務の一環ですので、企画や取材の際はどの学生も真剣です。他の学生スタッフのそのような姿は刺激となり、「自分もやらなくては」という意志が強まりました。学生広報スタッフの活動は、私の「主体性」と「熱意」を引き出してくれたと感じています。

立命館は、学生がそれぞれの「目標」を見つけられる場所だと思います。私はインターンシップによって自分に足りないものとそれ



を克服したいという目標を見つけました。そして、学生広報スタッフの活動で多くの学生や教職員の方々と関わることで、その目標に向かって成長できたと思います。

立命館のさまざまな学生活動は、ただ日常を過ごすだけでは分らなかった「自分自身に必要なもの」を学生が自発的に見つけ、成長していくための素晴らしいチャンスであると思います。在学生や今後入学する学生にも、このような機会を大切にしてほしいですね。

資格取得をサポートする教育プログラム、難関進路を切り拓くための教育プログラム

立命館大学では、学生の皆さんの将来の進路を切り拓くための資格取得のサポートや、国家公務員や公認会計士などの難関進路を達成するための講座を用意しています。新入生の皆さんも将来の目標を達成するためにこれらのプログラムをどんどん活用してください。



エクステンションセンター講座

毎年、立命館大学の3分の1以上にあたる1万4千人もの学生が受講するエクステンションセンター講座。多彩な講座やプロの講師陣、最新の試験情報に基づくカリキュラム、また、キャンパス内での受講による利便性や格安な価格設定など、学生に配慮した支援が用意されています。

言語習得センター（CLA）講座

言語習得センター（CLA）講座では外国語運用能力をさらにレベルアップしたい人のために、外国語の講座を開講。検定試験対策やディスカッションなど、正課とあわせて学ぶことで、より効果的に語学力の向上

をバックアップします。学べる言語は英語・ドイツ語・フランス語・ハンガール・スペイン語と様々ですが、特に人気があるのはTOEFL® 講座とTOEIC® 講座です。

立命館孔子学院による中国語教育講座

立命館孔子学院は、立命館大学が中国政府や北京大学と共同で運営しています。中国語講座はレベル別に多数開講し、初修者から上級者までを対象としたラインナップです。中国語検定やHSK（漢語水平考試）の対策講座もあります。講座以外にも中国の文化を知る孔子学院講座などのイベントを定期的開催。さらに中国映画を楽しむミニミニシアターや中国政府から提供された図書・AV資料を揃えたAVライブラリー（図

書室）開放など、中国語を学んでいなくても、中国に関心があれば誰でも有意義に活用できる施設となっています。

【主なプログラム】
● 中国語スピーチコンテスト
● 立命館孔子学院講座

教職支援

将来の進路の1つとして挙げられる学校教員。立命館大学では、これまで多数の教員を輩出してきました。1994年に教職センターを開設し、教員採用試験合格に向けた対策講座を展開するなどの学生サポートを強化しています。

2003年に教職支援センターと改称したのち、若手を中心とする立命館出身教員のネットワーク作りにも注力して、既卒者や現役の教員の支援も行っています。これらのサポートは全国でも屈指の充実度です。

国際社会で活躍する人材養成特別プログラム

国際社会でのキャリア形成を目指すモチベーションの高い学生を励まし、難関進路への挑戦をサポートするために、岡本行夫客員教授を中心

とした人材養成プログラムを2006年度から本格的に開講しています。

【主なプログラム内容】
● 岡本行夫客員教授による連続講演会・ゼミナール
● 多彩なゲストコーディネーターによる講義
● インドにおける経済・文化学習プログラム など



キャリアサポート

キャリアオフィスでは、各学部やインターンシップオフィス、エクステンションセンター、教職支援センターなどをはじめとした各部署と連携し、学生・院生の総合的な力量とコンピテンシー（強み）を高める仕組みを充実させるとともに、官公庁や企業、卒業生などとの幅広いネットワークを充実させ、学生・院生が幅広く進路を選択できるよう先進的な取り組みを進めています。



越 政樹 さん（経営学部4回生）旭川東高校出身
エクステンションセンター公務員講座受講生 文部科学省内定

私は、エクステンションセンターで公務員講座を受講していた先輩のアドバイスもあり、2回生から基礎コースを受講しました。また、試験勉強以外にも様々なことにチャレンジしたいという思いから、長期のインターンシップに参加したり、ゼミの仲間と共に「Opinist」というベンチャー企業を立ち上げたりするなど、やりたいと思ったことにはどんどん挑戦しました。「Opinist」は企業の社員研修事業を主に行う合同会社で、私は設立登記や契約書作成などの法務、経理・税務を担当しながら、研修内容や教材の開発、経営戦略の策定などを仲間と共に行ってきました。このような取り組みの中から、社会でどのようなことが求められているのか、またそ

こで学問がどのように活かされているのかということ学びました。
3回生では、少人数体制で先生との距離も近く、自習室などのサポートも充実した、国Iゼミを受講することにしました。講師や国Iゼミの先輩で現在中央省庁で働いている方から、仕事のやりがいについて何う中で、自分もチャレンジしようという気持ちが高まりました。エクステンションセンターではカリキュラムが完成されているので、カリキュラムどおり勉強すれば合格することは不可能ではないと思うようになりました。また、面接対策についても、一緒に勉強をした仲間たちと議論や模擬面接を重ねる中で自信をつけることができました。ともに同じ目標を目指

し、高め合える仲間がいたことは、とても心強かったです。
そのようなサポートのおかげで内定を得ることができ、4月からは文部科学省で働きます。学生時代に取り組んだベンチャービジネスは「無から有を生み出す」、「新しい価値を生み出し、周りの環境を変えていくこと」にその醍醐味があります。行政というフィールドで、これから自分なりの価値観を社会に提起し、日本全体を変えていくことを目指したいと思います。



本郷亜紀 さん（法学部1回生）大阪教育大学附属天王寺高校卒
国際社会で活躍する人材養成特別プログラム受講生

私は1回生の後期から岡本行夫客員教授による国際社会で活躍する人材養成特別プログラムに参加しています。これまで、歴史の1ページに密接に関わる外交官になるという夢をもち続けていましたが、目標に具体的に挑戦したいと思い参加しました。
プログラムでは、岡本行夫客員教授、宮家邦彦客員教授をはじめ、外交官やNGO職員等を始めとする様々な分野で活躍されている方のお話を直接伺う機会が多く、学部の枠を超えた受講生とともに学ぶことができます。第一線の実務家や、志を同じくする仲間とのディスカッションを通して、実践的に学び、自分の将来像を明確化できることが魅力です。

この春休みには岡本行夫海外研修奨学金をいただいて1ヶ月間インドで学んでいます。英語の授業とインドの経済・文化についての講義やIT企業やNGOへの訪問、ボランティア活動を通じて、インド経済の躍動や文化的エネルギーを目の当たりにする毎日です。
プログラムを通して、これからの外交官に求められていることとは何なのか、常に意識するようになりました。国際社会で通用する人物になるためには、確固たる目的意識と幅広い教養、語学力が必須だと痛感しています。自分の考えを、自信をもって積極的に発信することができるよう、今後もプログラムやインターンシップなどに活発に取り組んでいきたいと思っています。

